

## 師範学校の保育者養成機能と音楽教育実践に関する史的研究： 佐藤吉五郎『和音感教育』との関連から

保育科 鈴木 慎一郎

本研究の目的は、師範学校の保育者養成機能に関して、音楽教育実践に着目して明らかにすることである。本研究で対象とする師範学校には、高等師範学校、女子高等師範学校、青年師範学校を含めず、各府県に設置された初等学校教員養成を目的とする師範学校、女子師範学校に限定する（1943年以降、男子の在籍した師範学校と女子の在籍した女子師範学校が統合、昇格され、官立師範学校となる）。

教育・福祉研究センター「研究申請書」（2007年度）では、以下の4点を課題として掲げた。

- ①「保育実習」の中で音楽教育実践がどのように行われていたか。
- ②附属幼稚園における音楽教育実践は、どのような内容であったのか。また、師範学校との連携は図られていたのか。
- ③附属幼稚園で実践されていたとされる音感教育は、『和音感教育』（1940）の著書である佐藤吉五郎の提唱する方法に基づいていたのか否か。
- ④師範学校において保育者養成独自の音楽教育実

践の在り方というものが開発されていたのか否か。

残念ながら、教育活動や他の研究活動等に時間を要したため、上記の4点すべてを解決することはできなかった。2007年度重点的に取り組むことができたのは、上記の③についてである。

具体的には、佐藤吉五郎『和音感教育』に附録として掲載されている「一箇年の保育実際案」を検討し、佐藤の提唱する音感教育の特徴を明らかにした。また、文献だけではなく、昭和館映像・音響室の協力を得て、佐藤の実践が録音されているビクターSPレコード（A-3086-3089）の音楽分析を行った。その他、防衛庁防衛研究所、東京家政大学図書館等で資料収集を実施した。

研究成果の一部については、日本音楽教育学会第38回大会（於：岐阜大学、2007年11月10日）において口頭発表を行った（題目「佐藤吉五郎による幼児への和音感教育実践：岡山県女子師範学校で生まれた課題意識から」）。2007年度取り組むことができなかった課題については、今後、継続的に研究していきたい。

## 言語連想における時代的变化の検討 —— 小・中学生について ——

短大 心理学科 荻野七重（共同研究者 小杉洋子 聖徳大学）

2006年度に、幼児を対象とし、ほぼ30年という時間的経過の中で、連想反応語の持つ傾向がどの程度不変的なものであるのか、性差については変化がないか、どのような反応後の内容的変化が起こっているかを検討することを目的として言語

連想実験を行った。その実験の内容については、「研究年報」No.12（2007）に報告したとおりである。また、結果については、反応語の分類を年齢別に行い、全刺激語に対する反応語の出現率を求め、「幼児の年齢別連想反応表（2007）」（資料）